

Title	十六世紀のオスマン・トルコと中亜・南露周辺
Sub Title	Ottoman influence on Crimea, Astrakhan and Transoxiana in the 16th Century
Author	三橋, 富治男(Mitsuhashi, Fujio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1963
Jtitle	史学 Vol.36, No.1 (1963. 8) ,p.37- 65
JaLC DOI	
Abstract	Ottoman dynasty, at the height of its power, wished to keep in hand the supremacy on the Northern Coast of Black Sea, Don = Volga Basin and Transoxiana. The political aim of Ottomans was the re-opening, maintenance or protection of Pilgrim's Route for the muslims of the Northern and Central Asian Areas. However, its real aim was the grasp of the important route for "Profit-bringing trade" so-called "Kirim Astrahan-Maveraiin-nehir Yoli." Accordingly, Ottoman military actions with Janissaries and battalion of gunners against the aggression of Safavite Iran or Moscovite were connected deeply with its political, cultural and commercial interests. The necessity of this kind of research has already been advocated. A few observation will be made regarding the following points. 1) Transition from the Mediterranean trade to the Indian Ocean trades did not give any influence or change for the importance of this Inner Route. 2) Probably, non-official negotiation between Ottoman Turks and Ming Dynasty in China will be carried out by this Inner Route.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19630800-0037">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19630800-0037</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 十六世紀のオスマン・トルコと中亜・南露周辺

三 橋 富 治 男

一

史学第三十一卷第一—四号(慶応義塾創立百年記念)に於て、和田博徳氏は、「明代の鉄砲伝来とオスマン・トルコ帝国—神器譜と西域土地人物略」という有益にしてかつ示唆多き論考を寄せ、いわゆる「絹路」を通じて、カヌーニ・スライマーン一世(一五二〇—六六年)の明朝への遣使ないしオスマン・トルコ人による陸上からの明朝への鉄砲導入がなされたことを、中国側及び西欧側の陳述史料に基いて解明すべく史実考証を試みている。そこに述べられる交渉経路、とりわけその西端に当るサマルカンド以西の部分につきカヌーニ・スライマーン一世及びセリム二世(一五六六—七四年)頃を中心としてオスマン・トルコ側から眺める場合、どういふことに気がつくか、中亜、南露周辺とのつながりはどうであつたか、又如何なる形態の交渉関係が見られるか、この間の事情を以下述べるような視野から捉えようというのが、この小篇の目的である。蕪雜ながら同氏のすぐれた論考に対して些かでも補足できる個処があれば誠に幸といふべきである。

二

まず十六世紀という世代にオスマン・トルコが存在は亜欧状勢のなかで、どういう位置を占め又どういう影響を及ぼしたか、一般的な展望から見きわめて行きたい。

回曆十世紀、西曆十六世紀の中葉、トルコはカヌーニ・スライマーン一世の治下に比類なき盛世期を迎えて、当時の世界に於て最もダイナミックにして驚異的な強味をもつ国家となつた。宛も見えざる運命の女神はオスマン帝国に対しほゝえみ掛けていたかの感があつた。西方に於ては、スライマーンは全力を傾倒してハプスブルク王朝に当り長期にわたる戦闘で勝利を収めることによつて王朝からハンガリアを奪い、この王朝は僅かに掌中に残されたマジールの一部分を年々貢税支払の形式にて保持が許されたのである。ハプスブルク王朝のあらゆる努力にも拘らず北アフリカ沿岸一帯は、マグリブ（モロッコ）に至るまでオスマン支配下に帰するを防ぐことが出来なかつた。カプダンパシャ、ハイレツデイン・バルバロス（一四七三—一五四六）麾下のオスマン艦艇は事実上、地中海の支配者であつた。

だが、対欧抗争の最も重大な結果は、ハプスブルク王朝が、ヨーロッパで、ヘゲモニーを握らんとする計画を挫折させたことであり、かつ又、同朝の主要なる敵対者フランスのヴァロア・オルレアン朝・専制君主フランソア一世をして（註1）オスマン帝国と同盟関係を結ぶことによつてのみ政治的地位を安堵せしめたことであつた。つまりオスマン国家は欧州政局に均衡をつくり出す上に於て発言者として重要な役割を果したのである。

スライマーン一世は、みずからを「他の君主を凌駕する唯一の帝王」と称えた。この誇り高いスルターンは、書簡の中で、カール五世や、フェルディナント一世を決して皇帝と呼ぼうとはしなかつた。むしろ、みずからを「世紀の諸君主に命令を与える唯一者」とか、「世界の君主に王冠を授ける唯一者」の用語を使用していることが、Ahmet Feridun bey（一五八三年没）の著名な書冊「Münşeat üs selâtin」〔諸スルターンの書簡集の意〕（A. H. 1265, A. D. 1848）

スタンブール刊本より)のうちに散見している。<sup>(註2)</sup> 又反面、ローマ法皇に対する対抗意識から勃興期のプロテスタントに対する間接的防衛者、ドイツにおけるルーテリアンの側面的援助者たるべき役割も果たしたことを無視しえない。<sup>(註3)</sup>

しかし乍らオスマン帝国の政治活動を眺める場合、アジア地域—中央アジア、インド洋方面に対する動きも又決して閑却できないところであろう。インド洋方面に攻勢を展開するポルトガル人の圧倒的な海洋活動に對峙して、發達した火器を以てよく對抗できる唯一の実力者は、オスマン帝国に外ならなかつたからである。こうした信頼感を反映するものは東南アジアやインド方面の君公の動きで、例えば、セイロンやカリカットの君公はオスマン・トルコが援助を与えるならば、何時たりともムスリムとなることを約束し、又スマトラのムスリム君主は、遠路はる／＼イスタンブールに使節を派遣し、ポルトガルに對するための援助を乞い、スルターンは、この要請にこたえて船艇を送り、火器や、技術者を提供した形跡がある。

インド洋上に殆ど海軍力を持ち合せなかつたオスマン帝国はそうすることがポルトガルを牽制する上で有効な手段と考えたものゝ如くである。貿易の拠点とスケールの大きな貿易独占を求めるポルトガルの活動は、インド、マラツカ、スマトラ、華南、至る所で東洋人の抵抗を受けているとはいえ、オスマン・トルコがインド洋方面地域の抵抗にどれだけ寄与したかは実証性にとぼしい。後日あらためてこの問題を掘りさげる必要があると思う。たゞカリカットの商人はカイロ、アレキサンドリア、フェズに至る販路をもつていたから相互交渉の可能性を信ずるだけである。<sup>(註4)</sup>

だが東方世界に限つていうならば、オスマン・トルコの最大問題点の第一は、イランのサファヴィ王朝との抗争關係であつた。両者の抗争は東部アナトリアの高地に於けるバティーニリスファイ教団の反乱に端を發して長い破壊的な経過をたどつた。<sup>(註5)</sup> スライマーン一世はその長い治世のうち、イランのサファヴィ王朝と三回(一五三三—三六、四八、五二—五

五)にわたつて戦い、イラン騎兵軍団に対するに火器軍団とイエニ・チエリを以つて当り、タブリーズを攻略、バクダッドを占領、エル・バスラを併せ、カスピ海辺のアゼルバイジャンからシルヴァンを席捲した。たゞし一たびオスマン軍が西帰すると、イランのシャーは旧領を取戻し更に西進して東部アナトリアの重要都市、エルズルム、アフラト、エルジシュなどに侵寇している。このようにして、オスマン・トルコとイランとの抗争範囲は東部アナトリアからグルジャ、アゼルバイジャンからイラクに及んだ。問題点の第二は、モスクワ大公国の漸増的強大化と南下の勢いに伴うカスピ海・黒海北辺のムスリム諸邦の混迷状態と、オスマン・トルコとそれらの接触関係である。本稿では特にこの二点に論考を絞つておもにトルコ側の直面した事態とそれに対する政策面から眺めたい。

註 1 F. Hachett ; Francis the First. 1937, New York. After Pavia の条。

2 フェリドン・ベイはスライマーン一世及びセリム二世のサドラザム〔大宰相〕ソコル＝メフメット＝パシャの協力者で、サンジャク・ベイ〔地方知事〕を歴任し後にパシャにまで昇進した。やがてニシヤンジイ〔国璽尚書〕の職に就いた。こうした成行でスルターンの書簡集を編集する機会をえたものらしい。著作には“Münşat üs-Selâtin”と云う二冊本と“Nüzhet üi Ahbar”と名づける編年事項を含む史書がある。現代トルコ史家の利用する当代史料の一つとなっている。

3 S. A. Fisher-Galati ; Ottoman Imperialism and German Protestantism 1521—1555, Cambridge, 1959, The Turks & the Protestants の条。

4 K. M. Panikkar : Asia and Western Dominance (A Survey of the Vasco Da Gama Epoch of Asian History) London. 1953 P. 35. 参照

5 H. A. R. Gibb & H. Bowen : Islamic Society and the West Vol. I Part II 1957, Oxford U. P. London, P. 201 参照。

### 三

第一の問題点としてあげられるオスマン・スルターンと、サファヴィ朝イランのシャーとの抗争、対立関係であるが、まずこれをホラサーン方面につき眺めると、この地域はマワラン・ナフル(トランスオクシアナ)を後背地にもつ関係上、しばしば政治上、人種上、宗教上の相尅の場裡となる傾向が強く、スライマーン一世の時代にはシャイバーン(ウズベク)朝の指導者たちのもとにヒヴァ、ブハラ、タシケント方面居住の中亜ムスリム諸族が、シニア派のサファヴィ朝と不和、反目、侵人をくりかえし、ムルガープ川畔からメシエドに掛けての地域が烈しい攻防戦をくりひろげる戦場と化していた。それらの中亜種族はオスマン・トルコと同様スニーを奉ずる反シニア的立場にあつた。

トルクメン族の阿克・コユンル「白羊」部(一三七八一五〇二年まで存続)を Shurur の決戦で仆し成立したるサファヴィ朝(一五〇二—一七三六年)は広域イランの再建を画策していたのでウズベクの掌中に落ちたホラサーンの回復を念願し凡ゆる機会を通じてシャイバーン朝と対立を続けたのである。<sup>(註1)</sup> R. Grousset が *L'Empire des Steppes*

(邦訳アジア遊牧民族史) で指摘するように元来がモンゴル系の出自ながら言語、文化の面で既に完全にトルコ化し、<sup>(註2)</sup>

いわばムスリム・タイプの模範的君公の様相を呈するマワラン・ナフル方面の支配者たちは勢力拡大の意義から又共通の<sup>(註3)</sup>

宗派関係、共通の政治的利害からオスマン・トルコとの同盟を切望していた。例えば、上述 Feridun bey の “*Mün-seat üs-Selâtin*” に掲載のサマルカンドの君公、シャイバーン朝 Abdul Latif Khan (一五四〇—一五一年) が、スライマーン一世に送つた書簡では、イランに対するトルコ側の交戦を再三再四求める刺激的辭句がみられることで知られる。トルコ側でも鼓舞することを忘れてはいない。一五五〇年に寄せたスルターンのこの書簡に対する回答文が「同

盟することにより吾らはサファヴィ朝を克服できよう」との旨を述べて協力的態度を表明していることで判明する。けだしスライマーン一世は書簡の上でのみならず、一五五四年にイランとの講和条約調印の直前、同盟者たるタシケントの君公 Barak Navruz Ahmed Khan (一五五一—一五六年) の軍事力を増強するために、三百名余より成るイエニ・チエリの選抜部隊と、性能のよい火器と、銃砲射手隊を送っているのは、特別の関心を表示するためのジェスチュアに他ならなかつた。これらオスマン軍団は、特に中亜では「Rumi」と呼ばれて、最良の部隊の名をほしいままにした。<sup>(註4)</sup> それにしても中亜方面のムスリムは嘗つて金帳ハーン軍中で使中用されたという投射火砲と、その技術を熟知していた筈である。にもかゝらずオスマン火器兵団が、かく評価されているのは矢張り注目されてよい。この方面で軍事攻勢が展開できた陰の力として、オスマンIIスルタンの火器導入という側面援助があることを忘却してなるまい。イスタンブール大学の Zeki Veldi Togan 教授の「Bugünkü Türkistan ve yakın mazisi」〔現今のトルキスタンと近き過去という意 Cairo. 1928—40, p. 106—7. 改訂版は Bugünkü Türkili ve yakın tarihi〕はこの点に触れる。オスマン製鉄砲の明朝への伝来も何かこの辺とかゝわりがありはしないか。

金帳ハーン、チャガタイハーン、ティムール王朝などの勢力に左右され、或る時は南方、或る時は北方にと経済的、従つて政治的な従属関係の変化に応じて動揺を続けるのは、マワラン・ナフルのステップ住民の宿命であるが、茲に述べるように、イランとの抗争関係は、オスマン・トルコと中亜諸族との結付きを促進せしめる「くさび」であつた。総じていえば、十六世紀の中頃のイスラーム世界は、有能にして精力的な支配者を戴くオスマン・トルコをイスラムの盟主と仰ぎ、政治的、軍事的、経済的なつがりを求めて、その庇護と援助とを期待してやまなかつたかに見える。實際上、オスマン・スルタンは「Halife-i rûy-i zemin, すなわち大地の表面のカリフ」ないしは「Zî-Üllah, 神の影」と

みなされていた。オスマン・トルコ側でもセリム一世以来、メッカ、メデイナの両聖都の保護者を以つて任じ、かつ国外ムスリム住民に対して聖地順礼路の確保と、その安全とを保障していた。シャイバーン朝フワレズム君公の **Hacı Muhammed Khan** (一五六〇—一六〇三年) が **Haydar Bahadır** をセリム二世の宮廷に大使として派遣して、トルキスタン方面から来る聖地巡礼者がイランに入国するや否やサファヴィ朝が抑留し、又そのために数多くの困難が発生しているとの書簡を送達しているのはオスマン・スルターンの関心と庇護とを期待しているためである。ウズベク族のイランへの侵入が執拗なまでに続けられ、その都度シャー・イスマイル (一五〇〇—二四年) や、シャー・タハマスプ (一五二四—七六年) によつて撃退されてはいるものゝ直ちに勢力を盛り返しているのは、オスマン・トルコの如上の軍事補給が少なからず役に立つたこと以外に、オスマン・スルターンが東部アナトリアで常住サファヴィ朝に對して大きな戦果を収めていた事情に對する連鎖反応とみなしてよからう。

註 1 Sir, P. Sykes : *A History of Persia*. 1951, London, Vol. II. P. 159—161 参照

2 「史学」第三十二卷第二号、拙稿「オスマン・トルコ初期に於けるアナトリアとマワラン・ナフルの学术交流」特に P. 13 参照。

3 W. Barthold : *Histoire des Turcs d'Asie Centrale*, 1945, Paris. P. 186—187 サマルカンドのハーン、アブー・サイド (一五三〇年頃) の如きは、イラン語に関する知識は殆んど持ち合せなかつたといわれる。

4 Ankara Üniversitesi Yılıgi, I. 1946—1947 掲載 H. Inalcik. *The Origin of the Ottoman-Russian Rivarly and the Don-Volga Canal* (1599) (*Osmanlı-Rus rekabetinin menşei ve Don Volgakanal teşebbüsü*) P. 50 参照 (以下アンカラ大学紀要 イナリジク論考と略称)

5 ヤクボフスキー・グレコフ「金帳汗国史」(播磨櫓吉訳) P. 11—12

6 アンカラ大学紀要 イナリジク論考、P. 68 参照。

十六世紀のオスマン・トルコと中亜、南露周辺



## 四

第二の問題点としてあげられるものはオスマン・トルコと南ロシア方面との関係である。これより先、十五世紀の中葉以降、金帳ハーン国の解体期における南露方面に目を転ずるならならば、この地域には従来の単一帝国に代つて新しい名称をもつ小規模の政治勢力が接壊的に分離自立していた。例えばモンゴールの末裔乍ら、今はムスリム化したカザン、アストムハーン、クリム、カシモフの如き諸ハーン国、非ムスリム系としてモスクワ、リトワニアの如き大公国の侵入勢力がそれであつた。この地域は、Barthold が「東洋研究史—欧州とくにロシアにおける」で述べる如く地勢上、他地域よりも一そう強くイスラーム・オリエントの影響を受けていた地帯であつた。G. Vernadsky, M. Karpovich

「A History of Russia」vol. IV. 「Russia at the dawn of modern age.」(1959, London) によると、モスク

(註2)

ワ大公イワン三世(一四六二—一五〇五年)は金帳ハーンの残存勢力に対抗し、兼ねてまた自己の力量を強化するために、クリム・ハーンの Mengli Gerey(一四六九—七五、一四七八—一五一五年)に友好を求めて高価な貂皮や、海象(せいうち)の牙その他必要とする物質を送つたり、又ロシア商人にクリム・ハーンの高い関税(Tanga)を支払わせたり、或いはカザン・ハーンと、ノガイの族長(Murza)たちを握手せしめるために双方の通婚を媒介したり、或いは又、白羊部トルクメンと接近するためにヴェネツィア人 Marco Batfo を派遣したり八方手を尽している。

そうしたイワン三世の対ムスリム政策の一環としてクリム・ハーン Mengli Gerey との接触が、クローズ・アツプされる。当時クリム・ハーンはクリミア半島のみならず、アゾフ海からドニエプル下流の間のステップを領有していた。メングリ・ギレイは、ファティーフIIメフメット二世(一四五二—一八一一年)が一四七五年 Ahmed Gökük Paşaに

クリミアの重要交易港市、カッファ(註3) (現 Feodosia) の略取を命じた時、捕えられてオスマン帝国の宗主権と軍事保護

を甘受した。オスマン・トルコはカッファを含む若干のクリミアの城市を保有し、とりわけ、カッファには、サンジャ

クベイが常駐し、後にはシェフザーデ(註4) (スルターンの息) が総督として駐在することもあつた(一四七五年以来)、同

地の交易権は完全にトルコ人の支配下に歸した。クリミア市場で交易するロシア商人は、オスマン・トルコとは是非

共、友好関係を維持する必要があつた。イワン三世は周知の如く、ビザンティーンIIパレオロガス朝コンスタンティヌ

ス十一世(一四四九―五三年)の姪 Zoë を配偶者としたにも拘らず、オスマン・スターンとは友好関係をつなぎたか

つた。イワン三世はオスマン・トルコ傘下にあるメングリ・ギレイを常住信頼した訳ではないが、金帳ハーンや、リト

ワニアを牽制するには依然として利用価値ある同盟者とみなしていたらしい。(註5)

十五世紀末のオスマン・スルターン、バズイト二世(一四八一―一五二二年)は、又、黒海西北岸、ドニエストル下

流域をリトワニアから、ドナウ河口近傍をハンガリアから守るために、むしろ上記グリム・モスクワの政治ブロック

を支持することを得策としたため、イワン三世の抬頭を側面から援助する形となつた。友好促進のため、モスクワから

Mikhail Pleschchev がイスタンブールに派遣されたのも、このスルターンの治世であつた。

だが、一五〇二年、メングリ・ギレイがセライを攻略して金帳ハーンを滅ぼし、さらに又、一五五二年イワン四世(一五三

三―八四年)が従来カシモフ・ハーンを介して内政に干渉し続けたカザン・ハーン国を併呑して後は、モスクワ大公は偉

大なるべく、白いハーン(註6)の称号で二流勢力から次第に強力な一流勢力にのし上らんとし、しかもカスピ海北辺、カフカ

ーズ方面から、やがて黒海沿岸にも勢力を伸張せんとするに及んで右様政治均衡関係は急速に破れ去つた。モスクワの

動向は明らかに上記方面のムスリム諸邦に強い危懼の念を与えずにはおかなかつたからである。

抑々ヴォルガ河口を擁してメツカ巡礼者の溜り場として発達したアストラハーンの城市は、カスピ海經由で、中亜や中国に至る連絡の中枢点として知られていた。一五五七年にイギリスのエリザベス一世から派遣され、モスクワからカスピ海辺やブハラまで旅行し、モスクワ大公イワン四世から通商権を取得した英人 Anthony Jenkinson (一六一一年没)の示唆する所ではそのように受け取れる。<sup>(註7)</sup>

アストラハーンはカザン・ハーン国の滅亡後二年、一五五四年 Yanguici Khan の時代に至つて、モスクワ大公とノガイ族長たちの連繫合作によつて征服され、次いで Darvis Khan の時代にクリム・ハーンの救援も、モスクワ軍団の別働隊 Sheremetiyeff (Sernet-Oglu) に阻まれて空しく一五五六年にモスクワ大公国に吸収されるが、ジェンキンソンが訪れたのはその直後とみるべきである。なお、その際 Yanguici Khan や Darvis Khan はそれ〴〵身を以つて Azak (Azov) 所在のオスマン側の城塞に身を投じた。<sup>(註8)</sup> そうした急変事態に当面して、第三節で触れたスライマーン一世の同盟者たるべき筈の Barak-Navruz Ahmed Khan が、わざ〴〵特使をモスクワまで差し向けて貢物を届けさせ同時に外交上の委任を受けない商旅が交易活動を容易化するためにモスクワに赴いたのは、云うまでもなく自己の存立と交易上の利益―買占め、売却及び輸送などによる利益―を重視しての出来事としてのみ理解できる。しかしモスクワの動向はこのシャイバーン朝ハーンの期待とはおよそ反するものであつた。

上記 Hacı Muhammed Khan が、セリム二世に宛てた書簡ではそれがはつきりと示されている。すなわちオスマン・スルターンに対する彼の申し入れとして、サファヴィ朝を非難する辞句に続けて、カザン・アストラハーン方面を掌握して、この方面に強固な地歩を据えたモスクワ大公国が、巡礼や、キャラバーン商旅のステップ地帯通過を許さず難渋している旨を訴え、セリム二世に対して巡礼路打開のためには異端による妨害の排除に一臂を借すべきで、そのた

めには、アストラハーン方面を是非共奪回して欲しいとの切なる要望を披瀝している。殊にモスクワ大公に対するムスリム側からの苦情の訴えは可或り頻繁で、例えば、そのほかに、アラル海辺からクリミアに亘る *Deşit-i Kıpçak*（いわゆるキプチャク大草原）に生活圏をもつノガイ族の若干の者からも達した。因みにこの頃のノガイ族の族長たちは、オスマン帝国とモスクワ大公国との接点に位してその双方に対し可成り大きな政治的影響を及ぼしていた。

右のような苦情は、この論考で説明を要する問題点を示して呉れる。即ちムスリム側は巡礼遂行という宗教上の勤行問題と、この問題に仮口して、より以上に、亜欧内陸を往来するキヤラバン商旅の通商交易上の利害関係を大きく評価していることが窺われるのである。ムスリム側の見解によると、マワラン・ナフルから、ブルガルの故地たるアラル海、カスピ海北辺、カフカーズを経てイランに、一方又、上掲 *Deşit-i Kıpçak* の大草原を経てヴォルガ河辺からクリミア半島に出て、クリミアのカフアから小アジアのトレビゾンドやスイノップないしはイスタンブールに達する内陸通商交易ルートや、互市、交易関係を利用できるのはステップ・ムスリム住民の当然の既得権益であるとの意識が可成り強かつた。しかもムスリムは自己のもつ東洋的な文化や経済がモスクワよりも優位なものであるとの意識が働いていたことも否定できない。

そうしたルートは、十四世紀に *Ibn Battutah* が安全通路とみなした内陸ルート、すなわちイスタンブールから彼の場合スイノップを経由してクリミアにわたり、同地からヴォルガ河辺をたどつて、フワレズム、ブハラに出た順路と一応一致しており、しかも又 “*Travel and Travellers of the Middle ages*, 1926, London, [V.] Arab Travelers and Merchants, A. D. 1000—1500 (T. W. Arnold) 及び [VII.] The opening of the land routes to Cathay (E. Power) など” Istanbul, Kaffa, Tana (Azov), Serai (on Volga), Astrakhan, Urgenje

(Khiva), Bokhara-Samarkand, Almalik (Kulja) が十四五世紀頃の旅行者、商旅の常用路であつた。一三九五年ティムールによるタナとセライの破壊もムスリムの保有を否定するものではなかつた。

然るに今や、異端の成上り者（モスクワ大公）がステップ地帯における掠奪者の横行を封ずるとの理由で、そうしたルートからムスリムを閉め出し、その経済的な圧迫により交易の実利が失われることは、まさしく生存上由々しき大事であつた。マワラン・ナフルとヴォルガ下流域盆地との政治的な利害関係を結びつける紐帯となつたものは、おそらく、そうした経済事情であつた。

インド洋方面で海洋植民主義のポルトガルと角逐しながらも、そうした内陸動向に対応してオスマン・トルコが、上記ルート、つまり、トルコ史家のいう *Maveraünnehir* = *Astrahan* = *Kırım Yolu* の確保のために失陥した仲介拠点の回復を試みたのは、単なる信仰上の問題や、順礼路の掌握のためでなく、自己の目前にある経済的利害から割り出された綿密な計算づくめの動きであり、当然ムスリム世界の盟主を以つて自任するものゝ取るべき時宜を得た政治的措施でもあつた。

セリム二世治下のオスマン政府の首脳部が *profit-bringing trade* の重要性と必要性とを強調した論拠、しかも右ルートを通じて流入する物資品目のうちで珍重したものは何か。

高級毛皮類とくに貂皮であつた。このことは *Defter-i Ahkâm-i Mühimme-i Divan-i Humâyûn* <sup>(註10)</sup> すなわちオスマン政府の国政最高会議に於ける重要事項の決濟簿にも、しばしば引例される品目である。なお Barthold の「モンゴール侵入に至るまでのトルキスタン史」や Jakubovsky の「金帳汗国史」 <sup>(註11)</sup>（播磨檜吉訳）ないし、梅田良忠の

「ヴォルガ・ブルガール史研究」<sup>(註12)</sup>などに典拠を与える Shams al-din Abu Abdullah Muhammad ibn Ahmad Magdisi (十世紀アラブ地理学者) によつて、ヴォルガ河を仲継して行われる交易物資の主なるものをあげれば、

黒貂、貂、臭猫、貂鼠、狐、海狸、兎、山羊の毛皮、また蠟燭、矢、白楊皮、帽子、黒膠、黒齒〔海象の牙か〕ヒマシ油、鉄槌、刀剣、芳香、馬の鞣皮、銅、脱殻胡桃、甲冑、奴隸などがあつた。

十三世紀、ルーム・セルジューク朝時代におけるクリミア経由で小アジアに入る交易物資をみると、こうした種類のほかに、コバルト、手おりの絨緞、スルターンや宮廷吏僚の愛用する宝石などがあり、カッファ<sup>(註13)</sup>リスイノップ交易はこの王朝の重要財源であつた。

如上、列举したような主に林間、ステップ生業による品目にて構成されるマワラン・ナフル<sup>II</sup>アストラハーン<sup>II</sup>クリミア・ルートにのるべき交易は、いわゆる東地中海(レヴァント)貿易がインド洋貿易に切り替つた十六世紀に於て殆どその影響を受けておらず、ことにアストラハンがモスクワ大公の手に帰しても英人ジェンキンスの如きは極北貿易を断念する代りにマワラン・ナフルの物資を東地中海経由で交易しようと試みていることなどを考え合せると、さしたる質的变化はあるまいと思う。オスマン・トルコに於いては狩獵(avcılık)に使用する鷹(dogan)の需要があつたことも無視さるべきではない。

註 1 外務省調査部訳(生活社)第二編第十二章 P. 131 参照。

2 ヴエルナドスキー、第三章 P. 78~82 及び P. 89~92 参照。

3 カツファはトルコ語で Kefe。この城塞市はジェノア人により営まれた交易の中心地で、その富裕と力量とで、当時「小イスタンブール」の名称があつた。黒海北岸の重要都市。オスマン・トルコはジェノア人を黒海から駆逐するために攻略した。

十六世紀のオスマン・トルコと中亜、南露周辺

E. S. Creasy, *History of Ottoman Turks*. 1854, London, Vol. 1. P. 146.

4 ヴエルナドスキー、前掲書、P. 91.

5 ヴエルナドスキー、〃 P. 84.

6 バルトルド「東洋研究史」外務省調査部訳 P. 324 参照。

7 同上 P. 331

8 アンカラ大学紀要一、イナルジク論考 P. 61 参照。なおヤムグルチイ・ハーンは一五六九年に、エーゲ海の入口にあるロードス島に流されている。

9 同上、イナルジク論考 P. 68

10 トルコ共和国イスタンブールの Başvekilât Arsiv Dairesi「内閣総理府記録保存処」に所蔵され、オスマン政府の Divan に関する貴重、根本資料を構成している。

11 P. 7~8 (生活社 昭和十七年)

12 P. 101 (弘文堂 〃三十四年)

13 T. T. Rice : *The Seljuks in Asia Minor*. 1961. London, P. 105—106.

## 五

オスマン政府は、上述の如く、北方からはモスクワ大公国、南方からはサファヴィ朝シャーの両勢力に挟まれた中亜、南露方面の緊急事態を重視して本格的な措置をとることに決意したものゝ如くである。直接の動機となつたものは、ノガイ族長たちの指導者で、アストラハーン攻略にはモスクワ大公側に加担したる Ismail Mirza が、モスクワと合体して西に進みドニエプル河側面からクリミアを攻撃せんとする情勢であつた。このことはセリム二世を震撼させ、一五六九年の春季を期し北方への進撃をクリム・ハーンに上諭の形で示している。

この上論は、その前年一五六八年、セリム二世が *Kaffa* (*Kafe*) のベイとクリム・ハーンに宛てたもので、それによると、サマルカンドとブハラからの書簡とフワレズム(ヒヴァ)のハーン、*Haci Muhammed Khan* の要請に答えて、トルキスタン方面からの順礼者と商旅の安全を保障するため、アストラハーンからロシア兵を北方に放逐(*sürmak*) すべく再征服を決意したとあるが、折しもイラン側の攻撃に対抗すべくトルコからの救援を依頼するグルジャやシルヴァンの使節が到着したことも促進の動機と考えられてよい。宛もその頃フランスのシャルル九世(一五六〇—七四年)がイスタンブール駐在大使 (*G de Grandchamps*) から受取った公文によると、この遠征目的はカスピ海經由でシルヴァンに軍需物資を供給するためであつたと伝え、次の如き報告を寄せている。

“*Achever la tranchée des deux Fleuves du Vulgue (Volga) et de Thanays (Don) pour aller tomber dans la mer Caspia pour pouvoir mener et conduire vivres et munitions a Cirvan, et comme ceux-cy se deliberoient pour s'en assurer la paz de drendre deux grands villes des Moscovite, a scavoir Hadraan (Astrahan) et Cazan (Kazan) ……*”  
(註一)

さらに重大な報告はハプスブルク朝のイスタンブール駐在大使 (*A. de Wyss*) がマキシミリアン二世に宛てた報告である、これから述べる問題の核心に触れてくるからである。その内容は次の如くである。すなわち、オスマン・スルターンが、アストラハーンを奪還する必要上、又、上述の如き北方及び東方交易物資のイスタンブールへの運搬を容易にするため、ドン河—アラビア地理学者 *Ibn Haukal* のいわゆるルス人の河—と、ヴォルガ河—トルコ人のいわゆるイテル河—との間に舟行できる運河を建設すべく立案したこと、又オスマン・トルコはモスクワとイランとがこの計画に対して干渉を加えること必至とみて必要な対策をととのえたことを述べている。



一方バフチエ・サライ(クリムハーン国の首都)駐在のモスクワ大使は、ブハラ、ヒヴァから来る順礼者たちがカザン・アストラハーンをロシア人の手から解放して欲しいとイスタンブールに要請しており、それがオスマン・トルコでのアストラハーン遠征を促進したと述べており三者を対比すると幾分ニュアンスの相異がある。<sup>(註2)</sup>

これらの外交官の陳述は、オスマン古典史家で、カヌーニ・スライマーン一世の治世からムラト四世(一五二〇—一六三九年)末年に至る史書を著わした *Pecevi Ibrahim Efendi* (一五七四—一六五〇年)の陳述とも符合している。ペチエウイはセリム二世時代のサドラザム(大宰相)ソクル・メフメット・パシヤの近親者であつた関係で、その陳述内容は高く評価されてよい。スライマーン一世を承けて間もないセリム二世は若年であり、決して暗君という程ではなかつたが、ひどい飲酒癖があつたため、ソクル・メフメット・パシヤが支配権を掌握し、殆んど空前に近い宰相権を行使していた。手始として対欧関係調整のため一五六八年にはハプスブルク朝と有効期限八年の平和条約をむすび、ポーランドとは確執を解消した。このように戦線を整理して、東南欧方面の安全保障を獲得してからスライマーン一世の晩年に失つたアストラハーンを奪還する計画が樹立されたのであり、以後、さまざまな事件を生み出す遠征事業が開始された。

この遠征事業の経過については、*Zeki Veldi Togan* 教授の「*Edil-Don Kanali tarihine ait notlar*」(ヴォルガ河とドン河運河の歴史に関する覚書の意) 1949, *Çınaraltı, Istanbul* や、*アンカラ大学紀要第一輯* (Ankara Üniversitesi yaylığı) (1946—1947) に掲載される *Halil Inalcik* 「*Osmanlı-Rus rekabetinin menşei ve Don Volgakanal tesebbüsü*」(オスマン・トルコとロシアとの対立とドン、ヴォルガ運河計画の意)なる長論考があるので、それらの記述を取捨して妥当的な見解を示す素材としよう。

ソコル・メフメット・パシヤが考案した計画とは、イスタンブールから水路にしてアストラハーンに至る最短距離の兵站路を得ることであつた。快速船艇を以つて黒海洋上を東北上し、カフファ附近にてアゾフ海に入つて現在のロストフ (Azak Azov) からドン河に入り、溯流してドン河とヴォルガ河とが最も近接する Perevolok (ドン河の支流 Karpovka 川に臨む、現在の Stalingrad 地区) を經由してヴォルガ河に移り、ヴォルガ河を降つて河口のアストラハーンに達する。そのためドン河とヴォルガ河を連結する運河の建設ということであつた。

この運河の建設が完成すれば、オスマン軍団はイランの心臓部を攻撃するのに最も都合のよい足場を得ることが出来たし、モスクワをも同時に牽制することが可能であつた。

(註3)

因みにこの運河建設計画については古く Seleucus Nicator が立案したことがあるとの伝承は兎も角として、ソコルの先任者たる、サドラザム Semiz Ali Paşa の創案とも又はチエルケス (シルカシア) 人 Kasim Paşa の進言ともいわれるが計画を実行にうつしたのは他ならぬソコル・メフメット・パシヤその人であつたからこの計画はソコルと結び付けて考えてよいと思う。なお又、地中海と紅海とを結ぶスエズ地峡の開さくを思付いたのもソコルであつたといわれているがこの方は必ずしも明確でない。運河建設は大きな政治的冒険を意味した。オスマン宮廷の反ソコル派はセリム二世に対して大宰相のこの挙が幻想に等しいものであると共に莫大な浪費に終る投機であり、かつ又人命損失以外の何ものでもないとして説得して阻止すべく劃策した、ソコルは所信の実現に邁進した。カフファのサンジャクを始めた随処に必要な命令は発せられた。宮廷直属の造船技術者や若干の職人はカフファに送られた。又同地のカーデイ (回教法官) はオスマン兵のために乾麵麴五〇〇梱分相当の準備を命ぜられた。当時クリミア半島では凶作、飢饉が頻発したので対策として、アナトリアの Corum 所在のサンジャク・ベイやカーデーらがこの方面から穀物の輸送を行ふ手配を命ぜ

られ、穀物を山積した船艇がカッファに向つたことが上掲 Defteri Ahkam-i Mühimme-i Divan-i Humâyûn のなかに収録の令文で知られる。次に令文の冒頭部分を抜萃逐字訳すると〔便宜上アラビック字母をラテン文字に移す〕

「Çorum beyine ve Çorum sancakleri Kadileri hüküm ki

(註5)

Bundan akdem maliye tarafından muassalan hüküm şerifim gönderilip Kefe Canibine gidecek

asker zafer rehberere zahire tedarik Ferman olunmak Ferman olunmuş di ……

〔チヨルムのベイ及びチヨルム・サンジヤクのカーデイたちに命令すること斯くの如し、

これより先、財政担当部方面から最終的かつ詳細なる令書が我がシエリフのもとに送達されカッファ方面に赴くべき兵が、勝利を導くように穀物を確保すべき勅令が下されるとの勅令が出された〕

とある。

同時にカッファ在住の若干の富裕者は、この地のサンジヤク・ベイの命令で、食肉の供出を求められたことも知られている。

オスマン軍団はアストラハーン奪回のために特にカッファのベイレルベイに任令された所のカシム・パシヤの領導下におかれた。この者は、その方面の地形に暁通しかつ又チエルケス人に信望のあつた有能多才の聞え高い人物であつた(註6)とされる。ルメリー・アナドルの各サンジヤクのズイアメット、テイマール(いずれも軍事封土)の領主たちは所定の部署に就くため、黒海辺に集合してカシムの令に服するように命ぜられた。

Defter-i Ahkam-i Mühimme-i Divan-i Humâyûn の一令文によると(便宜上ラテン字母に移す)

“Sistire ve Nigbolu sancakleri beyleri kenduleri ve sancakleri sipahileri ve Küstendil sancaki

sipahiler Alay beyleriyle ve Anasya ve Canik beyleri kendulevi ve zuama (zaim の複数形) ve erbab timarlerle ……

〔シルストレヤ、ニコポリスのサンジャクのベイたち自身とそれ／＼のサンジャクのスイハピー〔封建騎士〕たちと、キユステンデイル・サンジャクのスイパヒーたちはアライ・ベイ〔騎士の統率者〕たちと共に、又アマスィアやジャニクのベイたち自身はそれ／＼ズィアメットの領主やティマールの領主たちと共に……

とあつて、シルストレ、サンジャクの Sinan Paşa 以下の兵力は凡てカシム・パシヤの領導下におかれたことを知るのである。上掲、イスタンブール駐在ハプスブルク朝の大使がウイーンに寄せた報告ではルメリー（欧領）だけでも十のサンジャク・ベイたちが動員を命ぜられたとある。以上を綜考すると、ルメリー・アナドル諸州から動員されたスイパヒー（員数は区々）馬匹、船艇と共に城塞攻撃用の重火器や、運河開さく用のシャベル、鶴嘴など含む土木工具が大量に用意されたものらしく、斯くして、世紀的な大計画は着々と準備された。

註 1 アンカラ大学紀要、上掲イナルジク P. 72 脚註参照。

2 同 P. 73 参照。

3 E. S. Creasy ; History of Ottoman Turks, 1859, London vol. I. P. 344

4 原語は Hassa-Reisleri 仮りに上掲の如くしておいた。

5 本来はメッカの知事や貴人をさすがここではカーデイ・アスケルをさすものゝ如くである。

6 アンカラ大学紀要、上掲イナルジク P. 74 参照。

## 六

黒海対岸のクリム・ハーンの側では、この事態を如何ように眺めていたであらうか。

これより先、十五世紀後半にクリム・ハーン国がオスマン帝国の保護下に入りその宗主権を甘受したことは既述したが、十六世紀に入ると自立体制を整えんとする傾向とオスマン・スルターンに對立する動きが顕著となつた。クリム・ハーン Mehmet Girey Khan (一五一四—一五三二年) がタタールの慣習に従つて自らハーン位に即き、オスマン・スルターン・ヤウズルセリム一世の同意を求めなかつたことも一つの表われであり、このことは両者間に不和をもたらし要因となつた。セリム一世はこの者の對立者たる Himmeth Girey を支持し、Mehmet Girey に代らしめんとする氣持が強かつた。クリム・ハーンへの反感はモスクワ大公国に對するトルコ側の態度に微妙に反映している。<sup>(註2)</sup> スライマーン一世の場合も又、同様の心境であつた証拠がある。Mehmet Girey は對抗上ポーランドと結んだ(一五二〇年) 一五二二—三年の冬には、クリム・ハーンはカザン、アストラハーンを一時略取すること成功し、ギレイ王家は暫時の間クリム・カザン・アストラハーンの三国に支配権を行使することが出来た。

だが一五三三年十一月、反クリム勢力たるノガイ族 Mannai のためメフメット・ギレイがアストラハーンからの帰路虚を衝かれて落命した<sup>(註2)</sup>、め忽ちその覇権も瓦解した。アストラハーンは旧君公でモスクワの同盟者たるヒュセイン・ハーンの掌中に取り戻されてしまつた。カザンのギレイ王家も又おしよせるモスクワ軍団のために追放されてしまつた。ギレイ王家は、やむえなくイスタンブールに保護を求めた。

クリム・ハーンに對するオスマン・トルコの影響力を再強化する機会とばかりスライマーン一世は、ギレイ王家の一員 Saadet Girey をハーン位に即けた。だが反つてこのことはクリム・ハーン国内部の封建的な内紛、抗争を誘致するのに役立つのみであつた。一五三二年九月に至つて、やゝ親オスマン的な Sahip Girey (一五三二—一五五一年) が、ハ

ーンに即くに及んで漸く小康をうる事ができた。この間クリム・ハーンは常任モスクワ大公国に対する侵攻と掠奪の手をゆるめず、Riazan, Seversk, Odoef, Bielef などが急襲されている。だが結局クリム・ハーン国は、漸増するツアルの圧力を前にして、オスマン帝国の保護なしには存立が困難であつたといえよう。

さて一五六八年、オスマン・トルコにおいてアストラハーン遠征の議が決定されると、クリム・ハーンの Devlet Geray Khan (一五五一—七七年) は、バフチエ・サライ駐在のモスクワ大使 Nagoy に対し次の如き申し入れを行っている。<sup>(註3)</sup> すなわち S. M. Soloviev, *Istoria Rossii s drevneishikh vremen.* (Moscow. 1851~79) によると

「…オスマン・スルターンは、ムスリムの郷土を併合しようと意図するツアルに対抗すべくムスリムたちを動員している。スルターンはアストラハーンを征服して余輩を同ハーンとして位に即けるであろう。戦火を交えることなしに、若しツアルがアストラハーンを余輩に委ねるならば、それは最良の方法というべきであろう」と。

一方又、セリム二世に対しては、次の如き論旨で遠征を思い止まらせようと進言している。

「…飲料水の不足、寒気、飢饉とがあり、又、アゾフ海は大船艇をのり入れるには余りに浅すぎるし、また小船艇では黒海の暴風に耐えられまい。モスクワ大公はアストラハーンに対して大軍を送り込むであろう。かつ、ツアルは、オスマン帝国が、他の問題に忙殺されている時をうかがつて、クリミアや、黒海沿岸を叩くことが出来よう。総じて、オスマン政府の企ては、期待するような成果を収めえないであろう。<sup>(註4)</sup> それならば、むしろ直接モスクワを攻撃するのが、より効果的な作戦である。余輩の進言をよく賢察の上、嘉納ありたい」

との旨を申し入れている。クリム・ハーンの心情は可成り複雑であつた。アストラハーンが軍団の進駐という外圧を加えられることによつてオスマン帝国の属州化することは自己にとつて好ましからざる事態であつた。むしろクリム・ハ

ーンはオスマン側の援助でアストラハーンを自家に収めたいと欲した。素よりオスマン・スルターンのためでなく、自己のためであつた。

註 1 一五二二—一四年イスタンブールに駐在したモスクワの大使 M. J. Alekseev (Gostenkov) と、一五一四年五月モスクワ

に着任したオスマン・トルコの大使。Kenai bey との会談が口火で、その後、イスタンブールに派遣されたモスクワの

使節 V. A. Korobov (一五一五—一六年) D. Stepanov (一五一九—一六〇一年) B. J. Golovastov (一五一九—一六〇一年) V. M.

Gubin (一五二二—一六〇一年) その他との会談が同盟関係の設定のために行われたが、結局実を結ばなかつた。アンカラ大学紀要

一、前掲イナルジイクの論考 P. 54 参照。

2 ibid. P. 55—56.

3 vol 6. P. 219. 因みに 1959 年モスクワ版と相違している。アンカラ大学紀要一、前掲イナルジイク論考 P. 77.

4 オスマン王朝の修史官 Ahmet bin Lütfallah Münecim Basi (十七世紀) の “Esseb'üs-seyyar,” P. 101 とモスクワ大使 Nagoy の報告を併せるとこのような見解となる。

## 七

イスタンブール駐在ハプスブルク朝の大使が誌す、一五六九年三月十二日付の書簡を引用すると、まさに「イスタンブールは陸上といわず、海上といわず、一切合財が戦闘の準備であつた」。同年同月十四日シャルル九世に送られたフランス大使の報告では「三千名のイエニ・チェリが三十隻のガレイ船にのり、数百隻の船艇は軍需物資を満載してイスタンブールから出帆した」とあつて、この年の春オスマン軍団はカッファ港に向けて輸送されたことを知るのである。カッファに於ては、クリム・ハーンが個人の資格で遠征軍に合流した。

五百名の兵員に援護されて、オスマン軍団の最も特徴的な兵器ともいべき大砲—それはファティーフリーメフメット

二世やカヌーニ・スライマーン一世によつて最大限活用されている―は、アゾフ海からドン河に沿つて船艇で水上輸送された。兵糧及び軍需物資はアゾフに貯蔵保管され、軍団は四十日分の兵糧を携行することがみとめられた。オスマン軍団は慎重に行動した。けだし常任ドン河岸の随処からロシア兵や、ドン・コサツクの伏兵から攻撃を受ける心配があつたからである。だがその考慮は無用であつた。五週間行軍の後、あらゆる兵種を含むオスマン軍団は、問題の Perevolok に到着した。上掲 Pegevi Ibrahim Efendi の Tarih によると、Kefe, Balıklava, Tat-ili, Mengup, Taman (Tmutorokan) などの各州から徴集された賃金労役者が大量に投入されて直ちに運河建設の工事が着手された。なお又、フランス大使 G. de Grandchamps や、ハプスブルク朝大使 A. de Wyss の報告によると、モルダヴィアやワラキア（ルーマニア）方面から徴集された労務者も使役されたい。約二ヶ月間で三分の一の行程が開きされた。ソコル・メフメット・パシヤは工事を激励するためにイスタンブールから船艇で工事補助監督をカシム・パシヤのもとに差し向けた。

ソコルの最も懸念して念頭から離れなかつた事柄は、モスクワとイランとが共同して、この際、妨害作戦に出ることであつた。モスクワ側では、ソコルのこの挙を以つて自己の領有に対する敵性行為とみとめて不快視したが、直ちにオスマン軍団に対し反攻に出ることはさしひかえた。<sup>(註1)</sup>又さしひかえざるをえない事情下にあつた。

それは、バルト海沿岸地域の保有問題を繞つて、スエーデンと、リトワリポーランドとが抗争中で、その方面の戦鬪の成行が、モスクワ軍団を「釘付け」にするに充分であつたからに外ならない。<sup>(註2)</sup>尤もモスクワ大公はイランに手を打つことだけは忘れなかつた。モスクワはオスマン帝国が、上述の如く、一五六八年の冬期の間に準備を完了し翌春を期して行動を開始する筈との情報を耳にすると早々に I. R. Novosiltesev を大使に指名し、良馬三〇〇―四〇〇頭を献物



として携行せしめて、タブリーズに赴かしめ、今次のアストラハーン遠征がイランにとつて如何に危険極りないものかを説明し、かつ又オスマン軍団に対峙すべくイラン軍の動員を求めたのであつた。<sup>(註3)</sup>ともかくモスクワはイランとの同盟達成に努力を傾けたのである。イラン側はモスクワの緊急提案を受けとり準備にとりかゝつた。恐らく重火器その他の武器の援助をモスクワから受けとつたものゝ如くである。

イスタンブールではこの情報入手するとイランがアナトリアの東部国境地帯を脅やすことを恐れて、一五六九年八月には、二十四名のサンジャク・ベイとイエニ・チエリ四千名とを付してアナドルのバイレルベイをヴァン湖近辺まで派遣して警戒に当らしめた。このことはフランス大使の同年同月三日付の報告で知られ、東部国境に於ける兵力集結は、ヴェネツィア大使の報告で知られる。そうする一方、オスマン・スルターンは、マワラン・ナフルの諸ハーンに通知して、イランの動員を北方から阻止することの約束を得ることにより、背後からイランを脅やかした。だが、事実上、モスクワからもイランからも攻撃は加えられずに済んだ。

運河建設を繞つてのそうした大きな外交活動にもかゝらず運河の開さくそのものは遅々として進捗しなかつた。とかく遷延する中に秋の訪れと共に日は短くなり、烈しい寒風が吹きはじめた。焦慮したカシム・パシヤは嘗つてメフメット二世がビザンティーン攻略に際して用いた有効な手段、すなわち、武器や糧食を載せた船艇を陸上げして植物油や獣脂をぬった木製のレールの上を滑らせ乍らドン河からヴォルガ河に移す方法を思いついた。だがそれは実現しなかつた。むしろ、クリム・ハーンは後退をすゝめ、少くともこの地で越冬することの不可能を主張してやまなかつた。

註 1 アンカラ大学紀要 一、上掲イナルジク P. 81 参照。

2 3 同上

P. 80 参照。

## 八

オスマン側の開さく工事が斯く進捗しなかつた理由は何か、その障害は他でもない。人為的加工に対していちじるしく抵抗性をもつこの地域の自然地形条件からも来ているのである。

現代の観察者が、現在の地形ないし地勢から推測すると、黒海に流入するドン河と、カスピ海に流入するヴォルガ河の水路は、いくつかの細流を伴い乍ら湾曲近接する個処の幅は約六〇キロ・メートル余しかないといわれる。<sup>(註1)</sup>だが丁度両河の水路が双方から湾曲近接する結節部分に挟まれたる中間地帯に標高九〇メートルの山地があることゝ、それにも増してドン河の河床がヴォルガ河の河床よりも四〇メートルも高位にあるために運河を建設することが困難である。この運河が現代土木技術を駆使して、ようやく開さく完通に成功するのは、一九五二年のことで、それも十三個の水門をもつ階段式の運河をつくることにより始めて二大河川を結びつけることが出来たのである。

そうした観点から眺めて十六世紀中ころの素朴な土木技術では、如何に人海戦術を以つてしても開さくは到底おぼつかない事業であつたといわなければなるまい。

こころみに一九五二年当時におけるソ連側の発表を次に引用して参考に供しよう。〔ハバロフスク放送による〕

「ヴォルガ河とは五月三十一日午後一時五十五分連結された。因みに今回開通した運河はヴォルガ河岸スターリングラードとドン河岸のカラチを結ぶ延長一〇一キロメートルのもので、この運河によつて白海、バルト海、カスピ海、アゾフ海、黒海の水上新路が実現されることゝなつた。その経済上及び軍事上有する重要意義については、この運河の建設計画がすでに十六世紀に考えられ、さらにピョートル大帝時代（十八世紀）にも計画され、その後も幾度か計

画が繰返されたといわれる点からも明らかであろう……」

と述べられている。この十六世紀に計画されたところのが、ソコル・メフメット・パシヤの計画した本稿で取りあげている開さく事業を指しているのである。結果的には失敗したとはいえ、カスピ海とアゾフ海、黒海とを結びつける着想と計画とはソコルその人物に帰せられてよいと思う。

右のような自然、地形条件から推して一日も早く完成を急ぐオスマン側の運河開さく工事がオスマン政府首脳部の焦慮にも拘らず停滞して動きが取れなかつたのは全く無理がなかつたといえる。

註 1 ドン、ヴォルガ両大河の最短距離を、一般に六〇キロメートルとしているのは恐らく直線最短距離を指すのではあるまいか。ソ連が開さくした運河の里程は一〇一キロメートルとなつてゐる。

## 九

如上のドン・ヴォルガ運河開さくが行悩みの状況に陥つてゐるカシム・パシヤのところに、アストラハーン・タタールの代表が到着した。代表はドン河地帯に膠着して時間を浪費させることなく陸路東進、すみやかに目的地を衝くのが捷計であると進言し、その場合にはノガイ族もアストラハーン・タタールもオスマン軍団に合流するであろうと約束した。かくて九月カシム・パシヤはアストラハーンへの直行に踏み切つたのである。これより先、同地を掌握したロシア人は、専らクリーム、ハーンの反攻を防ぐ意味で、金帳ハーン国の衰凋時代に構築された所の古いムスリムの城市を見捨て、旧市の南方十二キロメートルの地点にあるヴォルガ河中の川中島に新城市―新アストラハーンを構築してゐた。<sup>(註1)</sup>カシム・パシヤは、防備の整つた強力な城市を攻撃することは敢えてしなかつた。だがパシヤの軍団が同地に到着し

てみると、城塞内のムスリム住民は武器を以つて歓呼してオスマン側に投歸した。大砲が到着しなかつたし、寒氣が訪れたのでカシム・パシヤは城市に対して正攻包圍戦法をとることが出来なかつた。

新アストラハーン城市内のロシア兵との間に若干の小ぜり合いが演ぜられた程度であつた。カシム・パシヤは、春の到来を待つために旧城市の廢墟の上に木造の宿營を構築して対峙する決意をした。この報道がオスマン軍国の兵に伝達された時異常な激昂が起つて、冬期滞在を拒み、「我らは飢饉のために仆れてしまふであらう。我がスルターンは三年分の糧食を与えた、然るに閣下は、凡てをアゾフに残し我々には四拾日分の糧食しか携行させなかつた、アストラハーンの人口では、我々に充分な糧食を供給しえない」と述べ、イエニ・チェリも又反乱をおこすに至つた。「我々もクリム・ハーンと同行してイスタンブールに帰還したい、閣下はパデイーシャを欺いた、スルターンが Devlet Girey Khan の提言を受け入れなかつたのは閣下の所為である、ハーンがスルターンに書き送り、又我々の面前で閣下に申し述べたことは凡て正しかつた……」として騒然たる状況となつた。さらに具合の悪いことは、モスクワ大公がアストラハーンに對し援軍を繰り出したという風聞が播まつたことである。又モスクワとイランとの攻守同盟の成立がまことしやかに喧伝され始めた。さらに又、ノガイ族が長くモスクワと秘密同盟關係に入つたとの風説までも加わつた。このようにしてアストラハーンに到着したオスマン軍国は、軍律が乱れ、集團逃亡者が続出する始末で、軍事目的を達成することなく後退せざるを得ない結果となつた。カシム・パシヤは遂に意を決して、木造の宿營を焼き払い撤退を開始した。<sup>(註2)</sup>重量兵器は搬出不能のまゝ地下に埋没した。時に一五六九年九月二十日のことであつた。

カシム・パシヤがアストラハーンを離れて、六〇キロメートルの地点に達した時、来春まで待機すれば有力な援軍を送ること、かつ大臣の Piyale Paşa をモスクワ攻略のために進發せしめる旨の通告が届いたが、既に時は遅かつた。

カフカーズの北方の、水なく、野菜なき乾燥ステップを通過してアゾフに至る約一ヶ月の撤退には辛酸を嘗めつくした。公文書の性格をもつとみられるメフメット四世時代のシャイヒュル・イスラーム <sup>(註3)</sup> Abdülaziz Karagelebi zade (一五九一—一六五八年) 著「Ravzat-ül-ehbar」(正しき人の庭の意) 名称の史書によると、<sup>(註4)</sup> 兵の大半が仆れたとある。

しかも、アゾフにたどり着いた時、貯蔵物資や分捕品は故意か偶然か大火災のために灰燼に帰した。不満なイエニ・チエリが放火したともいわれている。放火しないまでも消火しなかつたことだけは確かであつた。このようにしてアストラハーン遠征は失敗のうちに幕を閉じた。

モスクワ大公国は、盛世期のオスマン・トルコと直接干戈を交えるには未だ弱体であつた。<sup>(註5)</sup> オスマン・トルコによる再度のアストラハーン遠征を警戒すると共にクリム・ハーンの侵攻に手を焼くモスクワとしては、<sup>(註6)</sup> カザン・アストラハーンを掌握出来たことで満足しなげなかつた。この出来事以来オスマン帝国は、北方を完全にクリム・ハーンに委ねることゝなつた。一五七〇—七一年にかけて休戦交渉のためツアルの使節が訪土するが、その際セリム二世が、再三にわたり提示要求した休戦条項の重要項目は、(一)アストラハーン・ルート<sup>(註6)</sup>の再開、(二)このルートを阻害する Kartay の如きロシア側要塞の破壊、(三)オスマン帝国に至る商旅の道中安全保障であり、七一年三月イスタンブールに到着した A. I. Kuzminsky が、この条項を受理する旨のツアルの親簡をセリム二世に手交した。右の休戦条項こそとりわけ注目さるべきであろう。

註 1 Ency. of Islam (New Edition) B. Spuler 執筆アストラハーン項目参照。

2 アンカラ大学紀要前掲、イナリジク論考、P. 82~83

- 3 イブン・バットウタの「三大陸周遊記」によると「キプチャクの平原は樹木も山も丘もなく横断に六ヶ月を要するとする。  
前島訳 P. 163 可成り誇張が行われている感がある。
- 4 Z. V. Togan. *Tarihde Usul*, 1950, Istanbul. P. 226 参照。
- 5 アストラハーン遠征挫折の直後、クリム・ハーンはモスクワを包囲して、その郊外に焼打ちをかけ、それが大火災となつてモスクワは焦土と化した。
- 6 アンカラ大学紀要一、前掲 H. İnalcik 論考 P. 89~91 参照。

## 十

十六世紀という時点においてオスマントルコと中亜、南露間の複雑なる相互関係は、単なる編年史の表面からは観取できないかも知れない。しかし、そこにオスマン・トルコの内陸ムスリム撫綏の姿が見られる筈である。そうした撫綏は、果してオスマン帝国と中国方面との交渉関係と無縁のものであつたろうか。少くとも次のことは言えよう。

(一)十六世紀に於ては、東部アナトリア、ザカフカース方面に於て接するオスマン、サファヴィ両朝の国境は多年の対立、抗争のために封鎖同然の状況にあつたこと、換言すれば、十六世紀には、小アジアのこの方面を通過する交通路は、カリフ政権時代や、セルジューク朝ないしモンゴル政権時代のような開放性をみとめ難いこと。

(二)十六世紀のころ、スライマーン一世の治世の晩年近くに、アストラハーンがモスクワ大公国の手に落ちるまでは、Istanbul ならぬ Trabzon = Kırım = Astrahan = Maveraünnehir ルートが、いわゆる「絹路」の By Pass という意味でなく、本街道筋の交通通商路として内陸アジアのムスリムに利用されていたことなどを組み合せて考えるとスライマーン一世時代に於けるオスマン・トルコと中国との交渉関係を、このルートを結びつけて「アゾフ」から「北京」にというように考えるのが無理のない、むしろ自然な考え方ではなからうか。(一九六三・三)